



岩田公雄 氏



連合駿台会報

No.309 平成25年5月15日発行
 発行・編集 連合駿台会
 発行人 広報委員長・齋藤柳光
 編集人 事務局・矢嶋まゆ子
 〒101-0052千代田区神田小川町三―一二
 明治大学「紫紺館」内
 電話(〇三) 三二九六一四七四七
 印刷 有限会社 美 創

連合駿台会三月例会

「時代の風―政治経済の変化を読む―」

読売テレビ報道局特別解説委員 岩田公雄氏

連合駿台会平成二十五年三月の例会を、三月二十七日(水)十八時より、明治大学「紫紺館」三階会議室で、岩田公雄氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、山口政廣会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

昨年は主要各国でトップの改選年にあたり、日本と関係の深い国では、再選されたアメリカのほか、中国、ロシア、フランスで代わった。今年では中央銀行の総裁が代わる年であり、日本では白川方明氏から黒田東彦氏に、六月にはロシアとイギリスで交代が予定されている。過去の総裁人事を見てみると、交代時期にはちょうど財政が手詰まりになっており、それを解決するために金融緩和をせ

ざるを得ない。結果としてその国の通貨は弱くなり、下降基調になるのが一般的である。日本も円安が進み、輸出産業にとってはありがたいことだが、この動向は微妙である。

三月十五日には安倍総理がTPP交渉への参加を表明した。しかし先行して参加した十一カ国のうち、シンガポール以外は議案によっては引き下がっているのが現状で、国内でも一部の閣僚が反対意見を述べるなど、必ずしも足並みが揃っているとは言いがたい。ただし総理はオバマ大統領と事前に協議したと言っているし、日本の参加にはアメリカ議会の承認が不可欠なので、その手続きは今年の七月くらいから始まるかと思う。日本の場合、貿易、特にそれに伴う規制が厳しいと各国から責められているので、そういう情報と照らし合わせながら、TPPの動向を見ていく年になるのではないか。

連合駿台会では、昨年から各委員会の課題とそれに伴う横の連携を強くするために運営委員会(委員長会)を設置し、隔月に開催してきた。結果、委員会活動も活発になり、たとえば組織・会員増強委員会では、約五十人の新入会員を勧誘できた。今後は本日のように多くの方々に出席していただくため、例会のあり方や工夫が必要であるかと思う。大学支援については、われわれの新しい見方かどうかというお手伝いをしていただければ効果的なのか、校

友会とは違う関わり方があると思う。そのためには財政基盤もしっかりしなければならぬということ、財務委員会にもご苦労いただいている。きちんとまとめた上で次回の総会でご報告する予定だが、活動をしっかりとするために、皆さま方のますますのご協力をお願いしたいと思っている。

当日の講演の要旨は以下の通りです。

*

私はこの世界に入ってから三十九年目になるが、北海道旭川から上京した頃は、学園紛争、東大紛争、新宿騒乱、成田闘争という中で、都内が機動隊の盾や催涙ガス、過激派の学生の角棒、火炎瓶などが飛び交っているような時代であった。自分がそういう現場へ足を運び、何故こういふことが起きるのか？ということを見つめてもいた。それとともに、大学在学中、自分の将来を考えると、そのようなようにして触発された事柄から逃れられなくて、世の中の動きに堪えず接していきけるような仕事、最終的には歴史の接点に自分の身を置きたいと思ひ始め、卒業後はマスコミを目指し、大阪の読売テレビに就職した。

事件記者として重要事件を担当

東京では政治部や経済部からスタートするが、大阪では社会部、すなわち事件を中心を追っかけることになる。しばらくして大阪府警の記者クラブに配属され、最初は暴力団

をウォッチする捜査四課の担当になるのだが、関西には強大な広域暴力団組織があり、その抗争事件の激しいさなかに取材記者になったわけだ。一九八四（昭和五十九）年、京阪神を舞台として食品会社を標的とした企業脅迫事件・グリコ森永事件は私の記憶にも強烈に残っているが、当時は大阪府警のキャップを務めており、部下数人とともに、毎日二〜三時間の睡眠で現場を走り回った。

翌八五年には日航機墜落事故があり、墜落現場の情報錯綜する中、車で現場近くに向かい、ほぼ丸一日走つてようやく群馬県御巢鷹山だとわかり、奇跡の生存者四名の救出風景なども取材できた。数日後には、現場である御巢鷹山の頂上まで行かなくてはならないということ、道なき道を進んで行くと、そこに広がっていたのは、目を背けたくなるような凄惨な光景。遺族への取材も大変つらいもので、故・坂本九さんの奥様へのインタビューは、社の方針に背いて拒絶したほどである。「いま、どんなお気持ちですか？」などは、到底聞けなかった。後にこの事故を題材にした『クライマーズ・ハイ』が、原田真人監督により映画化される際、体験談を話したところ、取材に協力したということでもロールスパー（エンドクレジット）に私の名前が出てくる。いずれにせよ、日航機墜落事故にはいろいろな思いが去来する。

マニラでは初代支局長に就任

一九八六年秋にはタイ航空機爆発事件取材でマニラに派遣され、事件も收拾して帰国を目前にしていた夜、ほろ酔い加減でホテルに帰ったところ、日本テレビ外報部から一通のファックスが入っていた。それによると、三井物産の若王子マニラ支店長が、ゴルフ場の帰りに武装グループに誘拐されたので、至急取材体制に入れ、ということだった。前の事件は到着していたからローカルスタッフも解散し、車も通訳もない中で、この事件の取材のスタートが切られることになった。

入社以来三十九年、一つだけ自負しているのは、取材記録だけはメモ書きにして残していることであるが、当日の項目を見てみると、「若王子事件発生・取材開始」と書かれている。四日後に「日本テレビ応援チーム来る」となっていて、バトンタッチしたことがわかる。しかしその間、ホテルに戻って横になったという記載は一行もない。完全徹夜に近い状況で、移動の車中でウトウトしていたのが睡眠代わりだったのだと思う。取材ノートを見ても、よくこんな下手な字で書いたものから、レポートになる原稿を起こせたと感心するほどだ。人間、頑張れば、四日くらいは寝なくても大丈夫かもしれないが、その前にマニラの繁華街で酒を飲んでいたので、酩酊状態から取材を始めて四日間徹夜と

いうのは、やはり若さのなせる業だったと思うしかない。

その取材をバトンタッチして、帰国してしばらくした頃、パリ支局勤務の内示を受け、準備で忙しい毎日を送っていた。ところが突然社長に呼び出され、マニラはマルコス政権が崩壊してアキノ政権になったが、若王子事件は未解決だし、新政権に対する軍の反乱事件も起こるだろう。よって常設の新しい支局を作らなければならないことになった、と言われた。ついでには全国三十局の日本テレビ系列局の中で、家族を帯同して赴任する奴はいないか？ ということになり、暴力団を担当し、体力もあって使い減りしないという理由から、君に白羽の矢が立ったと告げられたのだ。ではパリはどうなるのかと聞くと、それはマニラから帰ってきてから行けばいいじゃないか、と言われたのだが、この約束はいまだに果たされていない(笑)。

八九年の秋までの三年間、マニラ支局長を務めたが、世界的にグローバリズムの風潮が進む中、アジア胎動期の前段階でアジア全体を見ることができたことは、大変勉強になったと思っている。また、歴史の接点に身を置きたいという理由からこの世界を選んだのだが、これはあの時に現場に立てたから今日までずっと現場にこだわれる自分がいるということにおいて感謝しているし、記者冥利

につきるような事件の現場にいられたのも、とてもよかったと今でも思っている。

天安門事件は記者生活の原点になった

その事件は、一九八九年、マニラでの任期を終えて日本に戻る三ヶ月くらい前の五月中旬、北京に行ってくれという日本テレビからの電話から始まった。北京ではいま学生と市民が民主化を求めて天安門に集まっております、この動向が世界中から注目されている。共産党単独政権の中国がどう変わるか、本当に学生とか市民の民主化に対し耳を傾けるのか、非常に重大な展開が見込まれるので、現場に応援に行つて欲しいということだった。三週間ほど北京に滞在して、天安門事件の取材をしたが、ご承知の通り、この年の秋にはベルリンの壁が崩壊し、東西の冷戦構造が変わつてソ連対アメリカの体制が崩れ、情報の流れも手伝つて「民主化」という動きが出てきて、あのソ連でさえ経済改革などと言いついてきた。そこで中国がどう変わっていくのかを見極めるのは、記者としてはまたとないいい勉強になると思った。

中になつたらホテルを抜け出し、天安門の現場に行つて、明け方まで学生や軍の動向を取材して欲しい、という最も危険なこと。学生たちと交流してわかつたことは、後に暴乱の徒といわれる彼らも、当時は国家転覆などとは言っていないし、大学でもっと自由にものを言いたい、自由にサークル活動がしたい、共産党幹部の子弟だけがコネで優先される不条理な就職活動は止めて欲しいといった、われわれ民主主義の国から行った者から見れば当たり前のことばかりだった。

中国も民主化の流れに乗つて変わるのだ、いい時に取材に行つたと思った。ただし、取材に行くには北京市公安局の前を通らなくてはならないので、自分を振るい立たせるため、当時流行つた『北国の春』などを歌いながら通つたのだが……。ちなみに中国人として初のノーベル平和賞を受賞した劉曉波氏と一緒の写真も残っている。

ところが六月三日から四日にかけて、中国人民解放軍は学生を中心とした一般市民に向けて無差別発砲や戦車や装甲車で轢き殺すなどの武力弾圧行い、多数の死傷者を出した。当日、私は公安に踏み込まれて、前線本部である北京飯店で拘束状態に置かれていたが、結局、残っていたカメラを持って現場に向かった。国家権力が自国民に向けて銃口を向けて引き金を引く現実を見るとは思わな

かったし、その場に立って取材している自分も命を失う瞬間が来るかもしれないという二つの恐怖が、私を震わせていた。民主主義というのは、この国には存在しないのか？とさえ思った。もう一つ強く感じたことは、欧米の記者と一緒に現場へ行くと、彼らはライトを点けて堂々とレポートしている。一方私は隠しカメラで現場を撮って、そのテープをウーロン茶の箱の中に偽装して入れて、それを北京から脱出する商社マンの奥さんたちに託して、成田空港で日本テレビのマークを着けた者に渡してくれ、というのが唯一の手段だったという違いだった。日本からは国外退去命令も出ており、記者たちがほとんど帰国するのを見て、CNNの記者に理由を聞かれたので、先の戦争での日本の話をして、日本とアメリカは違うことを説明した。

ところが、彼から、ジャーナリストは現場に一步でも踏み込んで、触れてみて、匂いを嗅いでみて、それを客観的に伝えるために存在しなければならぬ。それができないようでは、報道とは言えないだろうと言われ、私も返答に窮してしまった。今となっては、これが「生涯一記者」と言って、六十三歳になった今でも、マネジメントより現場にこだわる私の原点になっている。天安門事件の日、一九八九年六月三日は、奇しくも私の四十歳の誕生日でもあった。

禁句を口にして震え上がったことも……

それからたとえ少しくらい危険が伴っても、ジャーナリストである以上は最前線の現場に行こうと強く思うようになった。そして次に挑戦したのが北朝鮮である。ここはわが社が入ったことのない国なので、ありとあらゆるコネを利用して、一年間交渉を続けて、九一年にジャーナリスト訪朝団という立場で初めて平壤に入った。いろいろ案内してもらったのだが、裕福そうな子弟の集まる幼稚園や、二歳や三歳でバイオリンを弾く天才児たちの姿などを見せられても、向こうのプロパガンダだけでは信じられないと感じた。

ある夜、宿泊していた高麗ホテルに労働党の幹部を呼び出して飲んでいたとき、普通の庶民の生活を見たいと言ったら、翌日に平均的なマンション（アパート）の五階に連れて行ってくれた。そこに住む主婦に聞くと、税金もかからずこんな幸せな生活はないと言ったのだが、ふとベランダを見ると、乾燥トウモロコシが積んである。「これは召し上がるのですか？」と質問したところ、まるで主婦の応答を遮るように、通訳が「とんでもありません、これはブタのエサです」と答えた。しかしここは五階のベランダで、ブタを飼っているはずがない（笑）。日本に戻って放送する際、翻訳を確認してもらおうと、その主婦は「はい、時々食べます」と言っていたこと

が判明した。すぐわかることなのに、体面を保つことだけを考えている姿勢には、強い違和感を覚えた。

恐ろしい思いをしたこともある。ある日「あなた方は何でも隠したが、日朝友好のためにも、もう少しオープンにするべきではないか？」と切り出し、禁句である「大韓航空機爆破事件の実行犯・金賢妃元死刑囚と彼女に日本語を教えたといわれる李恩恵（日本人拉致被害者・田口八重子さんといわれる）の問題はどうなんだ？」という事に触れてしまったことだ。すると彼らはワナワナと震えて「岩田先生ともあるう方が、南朝鮮の策謀に乗ってわが主権国家に対して捏造を発するとは、断じて許せない」と言うではないか！これはスパイ罪で抑留されても仕方ない……、と私も震え上がったが、数時間ほど軟禁（？）された後、「岩田先生、今までよく一緒に飲んでいたわけですから、これは酒の席のこととして、明日からの取材に備えましょう」と言われたのだが、これでやっと日本に帰れる……、と安堵したことは今でも夢に見るほどだ。

翌年、平壤からの三日間の生中継を実現させるのだが、週刊誌に「擁朝派・読売テレビ岩田公雄」と名指しで非難された。天安門事件以後、知らないことにどうしても近づきたい思いからやったつもりだが、同じマスコ

ミからこういう風にかかれたことを残念に思った覚えがある。このとき、中継料をどうやって払うか？いくら要求されるのか？ということが問題になった。こちらとしては精査して出した金額を段ボールに入れていったのだが、どういうわけかドルで要求され、しかも領収書が必要かどうかたずねられた。こちらとしては当然ながら要求したが、いざれ平和な時代になったら現地に赴いて、生き残った(?) 関係者からそのときの真実を聞いてみたいと思っている。

【講師略歴】

岩田公雄 (いわた・きみお)

一九四九年北海道旭川市生まれ
学習院大学法学部卒業後読売テレビ入社、事件記者として、グリコ森永事件等国内の重要事件を担当した後、一九八七年にNNNマニラ初代特派員、NNNマニラ支局開設・初代支局長に就任。三井物産若王子マニラ支店長誘拐、日本赤軍潜伏事件、一九八九年六月の中国・天安門事件では惨劇事件の現場で取材に当たる。帰国後も北朝鮮ピョンヤンからの連続三日間の生中継をマスコミとして初めて実現したほか、自衛隊のPKO活動ではカンボジアを始めモザンビーク、ルワンダ、中東コソソ高原を取材。ま

次にやったのが自衛隊のPKO活動でカンボジア、モザンビーク、ルワンダ、ゴラン高原を回ったが、私はお膳立てのない自衛隊が、いかに苦労しているかの現実を見ることができた。またミャンマーでは自宅軟禁中のアウンサンスーチーさんに単独会見を成功させるなど、これまでの海外取材国はニューヨーク同時多発テロ現場とアフガン国境、サミット取材を含め四十五カ国に及ぶ。世界中で見たいいろいろな現場を思い出すたびに、歴史の接点に触れ合いたいという気持ちを叶え

たミャンマーでは自宅軟禁中のアウンサンスーチーさんに単独会見を成功させるなどこれまでの海外取材国はニューヨーク同時多発テロ現場とアフガン国境、サミット取材を含め四十ヶ国を超える。一九九二年からは読売テレビ制作で毎週土曜朝八時から全国放送している情報番組「ウエークアップ! ぷらす」に解説者としてレギュラー出演。
また「情報ライブ ミヤネ屋」でも、政治・外交などの解説を担当。
二〇一二年六月より「防衛問題を語る有識者懇談会」のメンバー。
二十一世紀(民間政治) 臨調運営委員。
著書に「テレビで言えなかったニュースの裏側!」(学習研究社)、二〇一二年九月PHP出版より「30秒で人を動かす話し方」が発売中。

ることができたと感じる。安倍政権が始まってアベノミクスとか安倍黒景気(あまりいい語呂ではないが……) などという言葉も出てきて、失われた二十年とかデフレ経済といわれた閉塞感に包まれた日本にも、明るい光が射してきたようだ。潜在能力はもともとあるのだから、かつて明治維新後や戦後の復興期にあったようなもう一度再生する力に期待したい。これからの時代を担う学生の支援、世界に雄飛できるような学生を育てていくことが、私たちの責任ではないかと思う。若い人の力で、もう一度日本を再生させて欲しいと心から願っている。 以上

◆広報委員会からのご案内(理事会議事録)

日時：平成二十五年三月二十七日(水)十七時
場所：明治大学「紫紺館」(二F会議室)

○新推薦会員承認の件

丸山組織・会員増強委員長から次のような説明があった。三月の初めに六名の方に推薦書が届いていたので、委員会を招集して審査し、理事会の皆様には郵送で承認の可否を取る形を取らせていただいた。結果的には全員(加賀美猛氏、吉田均氏、西脇司氏、小谷野正道氏、大前実之氏、的場栄一氏)が承認され、現在入会の手続きに入らせていただいている。今回はさらに四名の方が推薦されて

おり、相澤淳一氏、高橋一夫氏、馬場範夫氏、小濱雅説氏の全員について入会を承認した、という報告があった。(相澤氏と高橋氏については五月以降の入会を希望)。

これに関して、全員異議なく承認された。

また、今期は約五十名の新会員の勧誘を目指していたが、ほぼ計画を達することができた。お礼を申し上げるとともに、来年度もまたご協力をよろしく願いたい、という報告もあった。

○五月総会に向けて、各委員会より今期事業報告および次期事業計画について

〈総務・事業委員会 河村副委員長〉

当委員会は、この一、二年間、例会以外に活動らしい活動をしていなかったため、本日、委員会メンバーが集まって、新年度の新規事業について検討した。新年度の新規事業については滞っている部分を実行するほか、組織・会員増強委員会とも連携を取り、新会員の定着・懇親を含め、現在二つの事業を考えている。一つは現役ビジネス会員等を対象に、ビジネス勉強会を開催すること、二つ目は新規会員の定着や懇親を深めるため、歓迎会のような会を開催することで、どちらも早急に進めたいと思っている。既存事業では、会員相互の懇親会(バス旅行・ゴルフコンペなど)、昨年は大学支援委員会に管轄しても

らった新キャンパスの見学会(中野キャンパス・グローバルフロント)を季節のよい時期に実施するなど、結束して事業に取り組む所存である。

〈組織・会員増強委員会 丸山委員長〉

二十四年度は会員増強に力を入れ、これが一段落したので、来期は出席率、新会員の定着率といったものに焦点を当てていきたいと思っている。総務・事業委員会からも話が合った通り、若手の意見を聞いて、若手を増やし、それに伴う事業を立ち上げたり、説明だけでは会のことばかりにくいので、事前に「ゲスト」として例会に参加していただくことなどを検討している。また、入会基準については一応のガイドラインはできあがっているが、会社にはいろいろな形態があり、画一的な線引きは難しいので、現在もいろいろな運用基準を設けているが、それらを含め、今後は入会資格や運用に時間を費やして討議していききたいと思っている。

〈広報委員会 齋藤委員長〉

活用していただいているパンフレットは、新入会員の勧誘に大いに繋がったかと思う。ホームページは、例会の報告を、広報委員が持ち回りで記述する、関連するイベント、協賛事業についてもリニューアルして更新するようにするなどしている。このように少しずつ動きだしているが、今後はホームページに

カウンターを入れるなどして、活用実態を把握していきたいと思っている。また多くの方に名刺広告にご協力いただいたが、それに関してもいろいろな案を練っており、次回総会の事業計画の中で提案したいと考えている。

〈大学支援委員会 舟橋委員長〉

二十四年度の新しい試みとして、「商学部キャリア教育」というものを実施が決まり、りそな銀行、ホテルグランドパレス、京王電鉄の協力を得て、四月八日から七月十七日まで、各社二講座の講義をしていただくことになった。本年度の春の寄付講座は、J・フロントリテイリングの山本良一社長にお願いしているので、奮ってご参加いただきたい。また、就職情報誌「Career」(印刷部数一万部)で、費用をかけずに連合駿台会をPRするため、連合駿台会の会員会社の社長に登場していただき、一社三十万円の広告料を払って、社内外にPRすることを、今年の二月からスタートした。次年度は、①留学生の支援、②これは大学側の企画であるが、産学交流シンポジウムを五年ぶりに復活させて協力していきたい。以上二点を新しい事業として絞っていききたいと思っている。

〈財務委員会 谷委員長〉

財務委員会の今までの委員会活動は、決算の数字が出た後の結果報告が主な仕事だったが、今年度は九月の中間決算、先立っての

運営委員会では一月までの財務状況を報告させていただいた。ちなみに直近の二月末までのご報告をさせていただくと、収入面では、三月の見込みも含めて予算比三百万円ほどの赤字になる見込みだった。そのため各委員長にお願いして支出のコントロールをお願いしたところ、二月末までの収支差額は二百万円ほどのプラスになった。しかし三月は収入七十万円くらいに対し、支出が二百八十万円くらいになるので、最終的には若干のマイナスが出る程度だろう。特に、収入の約四〇%に当たる六百万円の予算を計上していた大学支援委員会が、半分ほどの経費で納めていただいたことで、トントンになったような感じだ。財務委員会としては、来期からは予算策定に関してもチェックして、責任を持っていきたいと思っている。いま六千万円超の基本財産としてあるが、うち三千万円が株の売却益で、千八百万円が有志寄付金であることを考えると、これらは別の目的で使われるべきで、そうすると本当の意味での正味財産は千三百万円になるので、その中から毎年三百万円の赤字を出すと、三、四年で底ついてしまうことになる。そのあたりもよく考えて検討し、健全な財政状況を確認していきたい。

来年度の予算案の作成は確かな数字で出せると思うが、昨年のように役員改選に当たる年は、組織が決まる前に予算案を決め、総

会で大まかな予算の承認をいただく状況になるので、期首の予算とは違ってくることは、今後ともご理解・ご了承していただきたい、という補足説明が専務理事からあった。これら委員会報告について、次の質疑応答があった。

・せつかく入会されても、出席率が悪い(別紙資料による)ようなので、これらを検討する必要があるのではないかと?

↓この事実に基づき、来期はそこに力を入れていきたいと思っている。

↓次年度は、HPなどで早めに全例会日程を公表するようにしたい。 以上

◆新入会員の紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略)



やまだ あきまさ
山田 晃久
昭和四十七年・法学部卒
(株)山田債権回収管理総合事務所
代表取締役
神奈川県横浜市在住



かがみ まもる
加賀美 猛
平成五年・政経学部卒
新菱冷熱工業(株)
代表取締役社長
東京都渋谷区在住



よしだ ひとし
吉田 均
昭和五十八年・工学部卒
(株)東京精密
代表取締役計測者執行役員社長
茨城県土浦市在住



にしわき つかさ
西脇 司
昭和五十年・経営学部卒
日本ゼネラルフード(株)
代表取締役社長
愛知県春日井市在住



こほの まさみち
小谷野 正道
昭和四十四年・経営学部卒
フォーク(株)
取締役会長
埼玉県加須市在住



おもらえ みつあき
大前 実之
昭和五十三年・商学部卒
ベップ・メイツ(株)
代表取締役
東京都江戸川区在住



まとはば えいいち
的場 栄一
平成六年・理工学部卒
カルガモ引越センター(株)
代表取締役
東京都板橋区在住



馬場 範夫
昭和五十六・文学部卒
（株）バンダイロジバル
代表取締役社長
千葉県佐倉市在住



小濱 雅説
昭和五十六年・法学部卒
（株）シーライン東京
取締役旅客船本部本部長兼総料理長
東京都江東区在住

◆明大ニュース

●教員人事 新役職者が決定

任期満了にともない新役職者が四月一日付けで就任した。

本学十番目の学部としてスタートした総合数理学部は砂田利一教授が、国際日本学部は白戸伸一教授が新学部長に就任した。横井勝彦商学部長、大六野耕作政治経済学部長、林義勝文学部長、荒川利治理工学部長は再任された。なお、六氏は寄附行為第十七条第二項第一号により、同日付けで職務上の評議員に就任した。

●六十五人の専任教員を新たに採用

明治大学の教育・研究のさらなる発展と向上をはかるため、二〇一三年度専任教員六

十五人が四月一日付けで採用された。

●特任・客員教員百一人を任用

明治大学では、高度で多様化する時代の要請に応えるために、社会の各分野で活躍する人材を特任教員、客員教員（特別招聘教授を含む）として任用している。本年度は百一人（特任教員二十五人、客員教員七十六人）が四月一日付で任用された。任期は特任教員が五年以内、客員教員が一年以内。

●二〇一二年度卒業式を挙行

二〇一二年度卒業式が三月二十六日、日本武道館で挙行され、七千九百六十人（学部六千八百十四人、大学院千四百六十六人）が晴れの日を迎えた。式典は学部別に午前と午後二部構成で行われ、いずれも総代への学位記授与に続き、福宮賢一学長の告辞、日高憲三理事長・向殿政男校友会長の祝辞、卒業生答辞、などでしこジャパン監督の佐々木則夫氏（一九八二年文学部卒）の記念講演、校歌斉唱と進行。満開の桜の中、卒業生は次のステージへの一步を踏み出した。

●博士学位授与式 五十氏（課程四十一、論文九）が博士学位を取得

二〇一二年度明治大学大学院博士学位授与式が三月二十七日、駿河台キャンパス・ア

カデミーコモン二階「ビクトリーフロア眺の鐘」にて挙行。五十名（課程博士四十一、論文博士九）が晴れて博士号を取得した。

●ロンドンパラリンピック「金」

秋山里奈さんに「明治大学特別功労賞」

卒業式の午後の部では、ロンドン二〇一二パラリンピック女子百m背泳ぎで金メダルを獲得した秋山里奈さん（法学研究科）に、『明治大学特別功労賞』が贈呈された。

●二〇一三年度「入学式」

二〇一三年度明治大学入学式が四月七日、東京・日本武道館で挙行され、約八千四百人が「明大生」としての第一歩を踏み出した。心配された低気圧の通過による影響も小さく、式典は予定どおり、学部別に午前と午後二部構成で行われ、いずれも福宮賢一学長が告辞を、日高憲三理事長は祝辞を述べ、午前の部は商学部の中村裕弥さんが、午後の部は法学部の荏原亮之さんが、新入生を代表して宣誓した。

●明治大学と中野区が

災害時の協力に関する協定を締結

明治大学と東京都中野区は三月二十八日、「災害時における協力体制にかかる基本協定」を締結した。四月に開校した中野キャンパス

が位置する複合都市「中野四季の都市(まち)」が都の広域避難場所に当たるため、総合的防災拠点を形成することが目的。両者は今後、災害時における大学施設提供や学生ボランティアによる支援、防災訓練実施などの分野で協力していく。同日開かれた区長定例記者会見には福宮賢一学長も同席し、田中大輔区長らとともに協定の共同発表を行った。

●卒業生の活躍

澤野久美氏(二〇〇九年農学研究科D修了)

①二〇一三年度日本農業経済学会大会、奨賞

②発表著書「社会的企業をめざす農村女性たち―地域の担い手としての農村女性起業」

顕著な研究成果を挙げた業績を公刊し、今後の一層の発展に期待を込めて授与された。

●OB市長

▽和歌山県海南市長(四月十四日無投票)

神出政巳氏(無所属③、一九七五年工学研究科修了・六十二歳)

▽熊本県長洲町長(四月十六日無投票)

中逸博光氏(無所属②、一九七八年商学部卒・五十八歳)

▽愛知県東海市市長(四月二十一日投開票)

鈴木淳雄氏(無所属④、一九六八年政経学

部卒、六十七歳)

●OB社長

▽タツミ(輸送用機器) 〓岡嶋茂氏(一九七七年工学部卒・六十歳)

▽アピックヤマダ(機械) 〓押森広仁氏(一九八四年商学部卒・五十二歳)

▽大和ネクスト銀行(銀行業) 〓草場真也氏(一九八二年経営学部卒・五十四歳)

▽J・フロントリテイリング(小売業) 〓山本良一氏(一九七三年商学部卒・六十二歳)

▽東京日産コンピュータシステム(卸売業)

〓吉丸弘二朗氏(一九八一年工学部卒・五十四歳、六月二十日就任予定)

▽遠州鉄道(陸運業) 〓斉藤薫氏(一九七六年商学部卒・六十歳、六月二十七日就任予定)

●校友会表彰式

校友会(向殿政男会長)は三月二十四日、学業・スポーツ・芸術などの分野で優秀な成績を修めた卒業生・団体を表彰する、二〇一三年度「校友会表彰式」を、校友会役員ならびに、日高憲三理事長、福宮賢一学長はじめとする大学役員・役職者の参列のもと、駿河台キャンパス紫紺館三階で執り行った。

●二〇一二年度スポーツ表彰

明大の名を高めた功績を称え
八十六人・十二団体を表彰

二〇一二年度のスポーツ表彰式が三月二十五日、駿河台キャンパスのアカデミーコン二階ビクトリーフロア暁の鐘で執り行われた。明大体育会長である福宮賢一学長、日高憲三理事長をはじめ役員・役職者、体育会各部長・監督が列席し、受賞団体・個人の榮譽が称えられた。この表彰は、国内外の大会で優勝するなどスポーツ活動に顕著な活躍をした体育会の団体・個人を表彰するもの。

●二〇一二年度リバティア카데미称号授与式を挙行

本学の生涯学習機関であるリバティア카데미(大友純アカデミー長〓商学部教授)は三月十六日、駿河台キャンパスリバティタワー23階の岸本辰雄ホールで、二〇一二年度の称号授与式を挙行。三百十六人に「アカデミー・マスター☆シングル(リベラルアーツ)」などの称号を授与した。

●黒川農場

「川崎市都市景観形成協力者表彰」受賞

黒川農場はこのたび、「平成二十四年度(第十九回)川崎市都市景観形成協力者表彰」を受賞した。これは、川崎市の都市景観の形

成に積極的に協力した者の功勞に対し、感謝の意と他の模範として広く功績をたたえることを目的に川崎市が一九九五年から実施しているもので、生田キャンパスの第二校舎A館とD館が表彰された昨年に続き、二年連続の受賞となった。

●優秀学生八十九人へ学部長奨励賞を授与

明治大学連合父母会が優秀な在学生を表彰する「学部長奨励賞」の受賞者八十九人が決定し、授与式が各学部の新入生および在学生ガイダンスの席上などで行われた。

この賞は、学部の二年生（経営学部のみ三年生）までの課程を修了した者の中から、学業成績の優秀な者を表彰。学業の一層の励みにするとともに、新入生の勉学に対する動機付けの一助となるように、連合父母会の支援の下、一九九六年度から実施しているもの。

●出版会二〇一二年出版記念懇親会を開催

明治大学出版会（会長 山本昌弘副学長）は三月二十九日、駿河台キャンパスリバティタワー二十三階の宮城浩蔵ホールで、二〇一二年度の刊行図書の出版記念懇親会を開催。飯田和人教務担当常勤理事、三木一郎学務担当常勤理事ならびに出版会編集部の委員らが参加した。

●世界に広がる協定校

明治大学は、マレーシア・サバ大学、カリフォルニア州立大学フラトン校、インドネシア大学と大学間協力協定を、ゲント大学と学部間協力協定を新たに締結した。これにより協定校は四十の国と地域で、二百二十二大学（学部間協定など含む）となった。

●大学評価の実務説明会を開催

公益財団法人大学基準協会（納谷廣美会長）は四月十七日、協会に大学評価の申請を予定する大学関係者を対象に、概要と準備方法などに関する実務説明会を駿河台キャンパスのアカデミーホールで行い、会場には約百大学五百人が来場した。

●「国際協力人材育成プログラム」

ガイダンス開催

明治大学、立教大学、国際大学の三大学連携による共同教育プログラム「国際協力人材育成プログラム」の履修ガイダンスが、四月二日の中野キャンパスを皮切りに、和泉・生田キャンパスで行われた。三キャンパス合わせて千人を超える学生が参加し、明大生の国際社会への関心の高さをうかがわせた。

●タイ・バンコクに

『明治大学アセアンセンター』を開設

明治大学は五月一日、タイ・バンコク市内スクンビット地区にある本学協定校のシーナカリンウィロート大学内に『明治大学アセアンセンター』を開設した。
<http://www.meiji.ac.jp/cip/aseancenter/>

●台湾・環球科技大学の創立者（本学出身）

や学長、理事長らが来訪

昨年十二月に明治大学と大学間協力協定を締結した環球科技大学（台湾）の創立者や理事長、学長ら一行が四月八日、駿河台キャンパスに来訪。リバティタワー二十三階の貴賓室にて福宮賢一学長ら明大関係者と懇談し、全学的な学術交流や友好を深めていくことを確認し合った。

●「熱血！気仙塾 in 明治大学」開催

山本俊哉研究室（山本俊哉理工学部教授）

と田村誠邦研究室（田村誠邦理工学部特任教授）は「熱血！気仙塾」と共催で四月十九日、「第三回熱血！気仙塾 in 明治大学―東日本大震災より三年目を迎え、夢からかたちへ―」と題した意見交換会を、コメントーターに安倍晋三首相夫人の安倍昭恵氏らを招き、中野キャンパスで開催した。

●東日本大震災を忘れない

宮城県女川町の女川中学校の生徒七人が

四月十八日、和泉キャンパスに大学史資料センター所長の山泉進法学部教授を訪ね、東日本大震災を忘れないための中学生たちの取り組みについて発表を行った。

●明大生が高校生に向けて
ボランティア体験を発表

本学のボランティアサークルである社会福祉研究部に所属する中野亜矢子さん（文3）と、学生赤十字奉仕団クローバーに所属する横溝未来さん（政経3）は四月十一日、和泉キャンパスの近隣に位置する、日本女子体育大学附属二階堂高等学校の保健福祉コース一年生約五十人を対象とするボランティア入門講座に招かれ、「人」に関わるボランティア活動をしている大学生の体験談」というテーマで、活動体験の発表を行った。

●平井彬嗣（政経2）が世界選手権大会
五人がユニバーシアード出場へ

第八十九回日本選手権水泳競技大会が、四月十一日～十四日にダイエープロビスフェニックスプールで開催され、千五百m自由形で優勝した平井彬嗣（政経2）が世界選手権大会へ、好成績を収めた五人がユニバーシアード選手権大会へ出場を決めた。

●東京六大学野球 早大を撃破！ 勝ち点2

体育会硬式野球部は四月三十日、東京六大学野球春季リーグ戦で早大に勝利し、初戦の立大戦に続き勝ち点を挙げ、通算の勝ち点を2とした。前半の大きな山場となった早大戦は、第四戦までもつれる接戦となったが、粘り強く戦い総合力で上回った。

◆駿台トピックス

●四月八日より新たな大学支援をスタート

新たな大学支援として「商学部のキャリア教育支援」が、四月八日より和泉キャンパスにて、「総合講座A産学協同就業力養成講座」としてスタートしました。商学部一年生、約二百五十名の応募があり、抽選により約百三十名（四クラス）に絞り込みました。四月二十五日は「ホテルグランドパレス」、



「京王電鉄」、翌二十六日は「りそな銀行」による学生への「企業概要のプレゼンと研究テーマの設定」を行いました。学生は部下として位置づけ、各社のテーマを一カ月間研

究し発表することになりました。発表は五月三十日と三十一日。

各社のテーマは「ホテルオンラインショップの拡販策」、「電鉄沿線の新しい生活支援サービスのコンテンツの提案」、「りそな銀行営業店の十年後の将来像」とかなりの難題をテーマとしましたが、若い発想と行動力で斬新なアイデアが提案されることに期待しています。

尚この講座は、もう一サイクル講義され、七月下旬に終了となります。

●「若手の意見交換会」を開催

組織・会員増強委員会は、近年、若手の新会員の方が多くなってきたことから、従来の例会とは違ったスタイルで、ゆつくり話し合えるような場を設けることを企画しました。



「若手の意見交換会」と称して、昭和三十年生まれ以降の会員を対象に、連休前の四月二十六日に、新橋の「新橋亭」で開催、専

務理事・委員会の役員も含め、二十六人が集まりました。

当日が初参加の方も何人かいらっしやいましたが、名刺交換も盛んに行われ、三卓に分かれての会食でも、終始、会話が弾んでいました。集まった方のご意見としては、現役世代が集まれるのがいい、今までは出席するのいやや遅れがあったが、若手だけだと思ふと参加する勇気が持てた、同世代だと、偶然に昔の同級生と会えるなどの意外な楽しみもある、着席制だと、初対面の人ともゆつくり話すことができて有意義だ……、などが寄せられました。

組織・会員増強委員会では、本年度は出席率、新会員の定着率といったものに焦点を当てていくため、総務・事業委員会とも協力して、若手の意見を聞いて、それに伴うイベントを開催していく予定です。

◆退会会員

(平成二十四年四月～二十五年三月)
青木信樹(故人)、秋山光男、稲辺利昌、今泉章子、植松寛(故人)、江澤和信、大江菊宣、大谷秋洋、小野耕司、西郷博久、佐藤一義、志村康司、高見真一、田村節夫、冨田芳男、中山智夫、二井秀明、堀口昌男、松浦一、三木睦子(故人)、宮永千秋、矢内啓、山本和巳(故人)、山元洋 (敬称略)

◆三月例会出席者

秋山隆敬、坪昭二、浅井宏、浅倉晴司、安達明正、同ご友人、阿部倫明、新井久晴、有賀隆治、五十嵐卓、池田勝也、石川かおり、石川均、石橋良一、石原裕司、泉山和久、伊東正博、伊原敏雄、植木榮、上西紘治、宇田川雄弘、内田八郎、大石哲也、大原幸男、大前実之、小國博明、小倉忠、押田裕介、落合由行、小野寺弘三、笠井正弘、荻部彰夫、河村博、木野幸士、木下重次郎、木村健一、古賀慎一郎、小柴和弘、小島清治、小山修、根田哲雄、近藤敏貴、斎藤柳光、坂田英夫、佐藤和正、佐藤健、佐藤寛、眞田瞳、澤野太嘉嗣、椎名茂樹、杉浦伸二、鈴木勝利、鈴木隆志、瀬下和夫、同ご友人、瀬戸正道、宗邦雄、園田英次、高澤徹、高橋郁夫、武内裕、武田宣夫、田代恭一、同ご友人、館林精二郎、谷慈義、田村駿、辻嘉右工門、天童美德、同ご友人、徳丸平太郎、戸部紘、同ご友人、泊三夫、中川敏洋、長堀守弘、中村欣治、中村豊、長吉泉、並木洋一、西尾勝治、西崎誠次郎、西山武夫、二宮充子、同ご友人、二宮忠、橋口隆二、蓮池信之、長谷川進一、濱崎治、原田榮、日高憲三、平川清、比良田幸雄、弘中徹、福田和彦、富士豊、藤巻伴英、舟橋達彦、前川一郎、松崎優子、摩尼和夫、丸山律夫、宮下隆、向井眞一、村岡

健、村山富市、室井恵明、森省三、安河内究、山口政廣、山田朝彦、山田勝、山田幸夫、結城康郎、義江邦夫、渡辺紀之、渡邊洋三

【編集後記】

春に一齐に芽吹いた新緑が、次第に濃緑へと変わっていくのが楽しみな季節になりました。この時期は新年度ということもあり、気持ちもどこかウキウキしてしまいます。

明治大学では今年も四月七日に日本武道館におきまして入学式が挙行され、約八千四百人の新入生を迎えました。大学でしっかりと学び、社会に貢献する人間になっていただきたいものです。先日、東京六大学春季リーグ戦も始まり、いよいよスポーツも盛んになります。卒業生としてこちらも楽しみな一つです。会員の皆様にはお変わりございませんでしょうか？

さて先日、昭和三十年生まれ以降の若手会員を対象にいたしました親睦会が行われ、二十数名の若手会員の皆様にご参加いただきました。普段お仕事の関係でなかなか例会に参加できなかった方々も多数お越しいただきました。年齢層も多岐にわたり、初対面の方々も多い中で、最初は名刺交換から始まりました。しかし、そこは同じ明治大学の卒業生。すぐに話も弾み、各個人の自己紹介では笑いが絶えず、大変盛り上がりました。組織・会員増強委員会の皆様の温かいサポートもあり、親交が深まったように思います。

会員相互の研鑽、親睦を図ると共に母校の発展に寄与することが、連合駿台会の目的であります。例会だけでなく、さまざまな場面で会員同士の親睦が深まり、それが母校明治大学の発展につながっていきますことを願っております。

(相臺 志造)